

- 9) 小嶋祥三(1987):音声言語の起源へのアプローチ. 第3回日本霊長類学会大会, 霊長類研究 3:148.
- 10) 三上章允・長田佳久・久保田競・三上文江(1987):サルとヒトの運動知覚閾の比較. 第3回日本霊長類学会大会; 霊長類研究 3:149.
- 11) 葉山杉夫・平林秀樹・日野原正・小嶋祥三(1987):喉頭ファイバースコープによるニホンザル・チンパンジーの声門の動態観察. 第3回日本霊長類学会大会, 霊長類研究 3:160.
- 12) 鎌田 勉・亀田和夫・小嶋祥三(1987):ニホンザル聴皮質ニューロンのクー音とその周波数成分に対する応答. 第67回北海道医学大会.
- 13) 三上章允(1987):仮現運動の心理物理学と生物学. 第51回日本心理学会大会, 発表論文集:19.
- 14) 藤田和生・三上章允・長田佳久(1987):霊長類の運動知覚閾(1) 1歳未満のサルの場合. 第51回日本心理学会大会, 発表論文集:170.
- 15) 三上章允・長田佳久(1987):霊長類の運動知覚閾(2) 2歳のニホンザルの場合. 第51回日本心理学会大会, 発表論文集:171.
- 16) 長田佳久・三上章允(1987):霊長類の運動知覚閾(3) 成人の場合. 第51回日本心理学会大会, 発表論文集:172.
- 17) 小嶋祥三(1987):ニホンザルの coo 音の弁別. 第51回日本心理学会大会, 発表論文集:428.
- 18) 沢口俊之・松村道一・久保田競(1987):サル前頭前野へのピククリン一側注入による遅延反応の障害. 第11回神経科学学術集会, 予稿集:37.
- 19) 大石高生・三上章允・久保田競(1987):前頭前野へのピククリン微量注入が学習行動に及ぼす影響. 第11回神経科学学術集会, 予稿集:37.
- 20) 三上章允(1987):上側頭溝における視覚情報処理. 第11回神経科学学術集会, 予稿集:120.
- 21) 藤田 忍・林 基治・松村道一(1987):抗ニューロフィジン モノクローナル抗体. 第11回神経科学学術集会, 予稿集:140.

- 22) 小嶋祥三(1987):チンパンジーの母音の知覚と正規化. 第11回神経科学学術集会, 予稿集:187.
- 23) 松村道一(1987):4層構造を持つモデル神経回路網の活動. 第11回神経科学学術集会, 予稿集:173.

心理研究部門

室伏靖子・松沢哲郎・藤田和生¹⁾

研究概要

- 1) チンパンジーの図形語による記述行動の分析²⁾

室伏靖子・松沢哲郎

チンパンジー(アイ)は, 異なった背景や配置で現れる3人の動画のどれがだれに近づいたかを, 語順によって, [主体名・近づく・客体名]と表現することができた。

- 2) チンパンジーにおける数の概念の形成

室伏靖子・松沢哲郎・板倉昭二³⁾

チンパンジーの数の同定(マッチング)の学習が, アラビア数字(1-7)およびタッピング(1-5)を用いて進行し, 形・色・大きさが異なる物の混合パターンに対して般化した。

- 3) チンパンジーにおける刺激等価性の獲得に関する実験的分析⁴⁾

室伏靖子・松沢哲郎・藤田和生

ヒトの言語の重要な一側面である刺激等価性の成立を規定する要因を, チンパンジーを被験体として分析した。

- 4) チンパンジーにおける心的回転⁵⁾

室伏靖子・松沢哲郎・藤田和生

チンパンジーに回転した同じ図形を選ぶことを訓練し, その反応潜時と回転角度の関係を分析することから, 彼らの「心的イメージ」の操作能力

-
- 1) 1987年4月から9月まで非常勤講師。10月1日付で助手に採用。
 - 2) 浅野俊夫(愛知大・教養)との共同研究。
 - 3) 大学院生。
 - 4) 浅野俊夫・山本淳一(国立伊東温泉病院看護学校)との共同研究。
 - 5) 浅野俊夫・山本淳一との共同研究。

を吟味している。

5) チンパンジーによる複合図形の「構成」

松沢哲郎・藤田和生

チンパンジー(アイ)に、複合した幾何学図形を見せ、同じ図形をその要素図形から再構成する課題(構成見本合わせ)をおこない、資料の解析をした。ヒトと同様に、報酬として食物を与えないでも行動が維持されることがわかった。

6) 霊長類乳幼児の行動比較⁹⁾

松沢哲郎

ヒト、チンパンジー、オランウータン、ニホンザルを主たる対象として、出生直後からの姿勢制御と認知機能の発達について種間比較をしている。

7) 野生チンパンジーの生態心理学的研究

松沢哲郎

西アフリカ・ギニアの野生チンパンジーの社会的発達(とくに母子間関係の変化)と、社会的知能(とくに道具使用行動)について、生態観察と実験的分析をおこなった。

8) アーミッシュの生態心理学的研究

松沢哲郎

アメリカ・ペンシルバニア州にすむアーミッシュ(アナバプティストに属するキリスト教徒)について、とくにその家庭と学校教育の調査をおこない、資料の解析をした。

9) 霊長類における種の認知の発達とその規定因の検討

藤田和生

霊長類の種の認知の発達を、サルの写真の強化刺激としての効力に基づいて調べ、同種個体あるいは異種個体との接触経験がその発達に及ぼす効果を吟味することにより、種の認知を規定する要因について検討した。

総 説

- 1) Murofushi, K. (1987): Historical bases and current status of comparative psychology in Japan. In: Historical Perspective and the International Status of Comparative Psychology (ed. by E. Tobach, Lawrence Erlbaum Assoc., New Jersey). 193-201.

- 6) 田中昌人(京都大・教育), 竹下秀子(滋賀県立短大・幼児教育)との共同研究。

- 2) 松沢哲郎(1987): チンパンジーの生態学と心理学—シカゴ科学院シンポジウムから—。霊長類の比較発達心理学 11. 発達 29:87-96.
- 3) 松沢哲郎(1987): アーミッシュの学校。霊長類の比較発達心理学 12. 発達 30:97-108.
- 4) 松沢哲郎(1987): アーミッシュの暮らし。霊長類の比較発達心理学 13. 発達 31:82-92.
- 5) 松沢哲郎(1987): チンパンジー・サラの知恵。霊長類の比較発達心理学 14. 発達 32:95-104.
- 6) 松沢哲郎(1987): 音声・聴覚メディアの進化。言語 16(11):26-36.
- 7) 松沢哲郎(1988): 「コミュニケーションの進化」に対するコメント。季刊人類学 19(1):82-95.

論 文

- 1) Tobach, E., Murofushi, K., Beatty, J., and Takahashi, J. (1987): Changes in social behavior of *Macaca fuscata yakui* in relation to unfamiliar objects. Bulletin of the Psychonomic Society 25:106-108.
- 2) 松沢哲郎(1987): チンパンジーの積木つみ。霊長類研究 3:91-102.
- 3) Fujita, K. (1987): Species recognition by five macaque monkeys. Primates 28:353-366.

報告・その他

- 1) Matsuzawa, T. (1987): Spontaneous pattern construction in chimpanzees. Video tapes from the symposium "Understanding chimpanzees." The Chicago Academy of Sciences.

学会発表

- 1) 室伏靖子・本吉良治・板倉昭二(1987): チンパンジーによる数のタッピング。第47回日本動物心理学会大会, 動物心理学年報 37:59.
- 2) 浅野俊夫・山本淳一・室伏靖子(1987): チンパンジーにおけるメンタルローテーション。第51回日本心理学会大会, 発表論文集: 280.

- 3) 松沢哲郎(1987): ヒトとチンパンジーの認知機能の発達検査。第3回日本霊長類学会大会, 霊長類研究 3:146.
- 4) 松沢哲郎(1987): 大型類人猿の言語能力。第41回日本人類学会・日本民族学会連合大会, 人類学雑誌 96(2).
- 5) 松沢哲郎(1987): 霊長類の行動発達—比較心理学的パースペクティブ—. 第2回日本基礎心理学会フォーラム.
- 6) 藤田和生(1987): 霊長類における種の認知—発達とその規定因—. 第3回日本霊長類学会大会, 霊長類研究 3:147.
- 7) 藤田和生・三上章允・長田佳久(1987): 霊長類の運動知覚閾(1) 1歳未満のサルの場合。第51回日本心理学会大会, 発表論文集: 170.

社会研究部門

加納隆至・大沢秀行・鈴木 晃

研究概要

- 1) ザイール共和国コンゴ森林におけるピグミー—チンパンジーの社会学的研究のとりまとめ

加納隆至・五百部裕り

1986年度の現地調査をもとにして, ピグミー—チンパンジーの集団間関係, 集団内個体間関係(オス間, メス間, ワカメスと他個体間, 母子間関係), 未成熟個体の社会行動, 性行動の発達, 造巢行動等の観察資料の取りまとめがおこなわれ, 一部は刊行された。

- 2) オランウータンの社会生態学的研究のまとめ

鈴木 晃

1983年からおこなっているインドネシア・東カリマンタン・クタイ国立公園でのオランウータンの社会学的研究のまとめをおこなった(1987年海外学術調査 代表者田川日出夫・鹿児島大学教授)。

- 3) 志賀高原横湯川流域に生息するニホンザル各群の社会学的資料の蓄積。

鈴木 晃

上信越ニホンザル研究林及び横湯川流域に生息するニホンザル各群の社会学的資料の蓄積をおこ

なった。

- 4) アフリカ地域乾燥サバンナにおける狭鼻猿類の野外研究

大沢秀行

カメルーン北部のカラマルエ国立公園においてパタスザルおよびミドリザルの野外研究を1984年より続けている。1987年度は採食生態の研究を現地でおこなった(生活史部門・中川尚史¹⁾)ほか, 社会変動の資料の分析をおこなった。

- 5) 父子判定に基づくニホンザルの繁殖戦略の研究

大沢秀行・光永総子²⁾

生化学研究部門で開発した父子判定の技術を利用し, これまで不明であった雄の繁殖効率, および繁殖戦略の研究を始めた。1987年度は, 霊長類研究所の若桜放飼群を対象に, 交尾期間中終日観察により全ての交尾の記録を取るようにした。交尾行動の解析は引続いておこなわれている。

総 説

- 1) 加納隆至(1987): 未知の類人猿: ピグミー—チンパンジーの社会。創造の世界。64:44-69.
- 2) 森 梅代・宮藤浩子(1987): 霊長類のメスの一生における育児行動および母子関係の変遷に関する研究—人間の育児行動, 母子関係の系統発生を探る—。安田生命事業団研究助成論文集 22(2):153—159.

論 文

- 1) Kano, T.(1987): Social regulation for individual coexistence in pygmy chimpanzees (*Pan paniscus*). In: Dominance, Aggression and War, D. McGuiness(ed.). Paragon House. pp.105—118.
- 2) Kano, T. (1987): Social organization of the pygmy chimpanzee and the common chimpanzees: similarities and differences. In: Evolution and coadaptation in biotic communities, S. Kawano, J. H. Connell and T. Hidaka (eds.). University of Tokyo Press. pp. 53—64.
- 3) Kano, T. (1987): A population study of a unit group of pygmy chimpanzees

1) 大学院生

2) 研修員